2023年11月30日発行

冬も本番が近付いてきました。
体調を崩さないように作業しましょう。

アグリ筑西
2023年 冬特別号

県西農林事務所　経営・普及部門
（筑西地域農業改良普及センター）
筑西地域農業改良推進協議会　発行
Tel：0296(24)9206
Fax：0296(24)6979

筑西地域農業改良普及センターHPへアクセス！↑

シリーズ「農業経営者に訊く」Vol.4

(株)ライス＆グリーン石島 代表取締役社長

石島和美さん

下妻市今泉地区で、主食用米のほか、輸出用米や飼料米、備蓄米、そばなど60haを耕作する大規模普通作経営体です。米の輸出やスマート農業技術にいち早く取り組むなど地域農業をリードする経営を実践されています。

●経営の特徴と課題について教えてください

圃場管理システムを利用して作業の進捗管理や、社員との情報共有を効率化しています。圃場内作業では、ロボットトラクターを利用した協調作業による作業能率の向上や、ドローンによる省力化と生産性の向上を図っています。また、農業機械の効率的な稼働のためには農地の集積･集約が重要課題と考えており、営農エリアを設定して圃場間移動を最小限にした農作業の効率化を図っています。

●輸出の取り組みについて教えてください

主食用米の需要が年々減少するなか、国内需給の影響を受けない輸出用米に取り組んでいます。本年の輸出米は14ha作付けし、約70tを生産しました。

輸出用米に取り組む同志で生産者協議会を組織し、現在の県西地区の会員数は17名となっています。協議会では、会員相互の情報交換や技術力向上のため、新品種や直播栽培などの現地検討会なども行っています。また、輸出米の集荷や販路開拓、有利販売のため、輸出販売業務を行う「百笑市場」を設立し、令和4年は19カ国に1,400ｔを輸出しました。

●今後の取り組みについて教えてください

スマート農業技術については、今後の地域内圃場整備と合わせて、低コストな水管理システムの導入を検討しています。また、米の輸出は、集荷に力を入れて、当面は3,000ｔに拡大する目標を掲げています。

最近、市内にも若手生産者が台頭してきています。これらの生産者を中心に、学びの場でもある農業団体「下妻CLST（クラスタ）」を通じて、技術の相互研鑽をしながら、後進の育成にあたっていきたいと考えています。また、そのような活動が地域の発展に繋がればと考えています。

貴重なご意見を訊かせいただきありがとうございました。これからも農業経営者として地域を牽引していってください。

特集　～農産物の輸出拡大に向けて～

現在、日本では人口減少・高齢化が進行しており、国内の食市場は縮小が見込まれています。一方で、海外では新興国を中心に人口が増加しており、世界的に食の市場が拡大しています。そのため、持続可能な農業経営の実現に向けて、国内だけではなく海外も視野に入れ、世界の市場に販路を拡げていくことが重要になると考えられます。

近年、訪日外国人観光客の増加や、「和食」のユネスコ無形文化遺産認定などにより、日本の食に対する関心が急激に高まっています。国としても、2020年に「農林水産物・食品の輸出拡大実行戦略」を策定するなど、食品等の輸出拡大への取組が行われているところです。

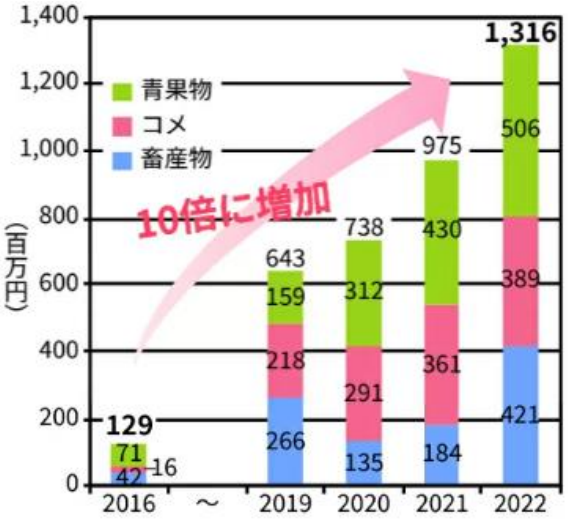

図　茨城県の農産物輸出額(出典：農業いばらき)
2022年度の農産物輸出額は過去最高を更新し、2016年度の10倍に増加しました。

茨城県においても、北米やアジアを主なターゲットに、海外での販売促進活動による県産農産物の知名度向上、既存販路の定着に加え、新たな産地の掘り起こしや、新たな国や地域での市場の開拓に取り組んでいます。農作物では、かんしょ、梨、メロン、コメに注力しつつ、意欲的でロットが確保できる品目・生産者に対して積極的に支援をしています。

茨城県の農産物輸出の取組については、「農産物輸出促進チーム」HPをご覧ください。

【 筑西普及センター管内での事例 】

下妻市のナシ輸出の取組

下妻市果樹組合連合会※1は、平成25年からナシの輸出に取り組んでいます。輸出開始のきっかけは、同年にタイで行われた国際展示会にナシを出品したことでした。展示会で食味アンケートを実施したところ非常に高い評価で、「海外でも売れる」という自信が得られました。そこで、タイ、シンガポールに少量ずつ輸出を開始することになり、平成29年からは、当時、輸出が解禁されたばかりのベトナムへ輸出を開始し、さらに、令和元年からは、新たなマーケットとして、米国向けの輸出も開始しています。

シンガポールの大手小売店での陳列状況
（オレンジのフルーツキャップをつけたナシ）

輸出量は、平成３０年には１５０t以上にまで増加しましたが、その後は、新型コロナウイルス感染拡大の影響等もあり、現在は最盛期に比べて減少している状況です。しかし、今年も輸出先から果実品質の高さを評価され、追加の出荷（輸出）について注文が入るなど、海外からのニーズを確認しており、引き続き、産地の販売チャネルの一つとして取組を継続する予定です。

なお、輸出先国によっては、生育期に何度も園地検査が必要となるとともに、出荷に際しては、病害虫に関する厳しい検疫を受けることになります。そのコストとリスクに見合うメリットを確保するため、JA常総ひかりを中心に販売努力を続けています。普及センターは、検疫合格に向けた病害虫防除等について、引き続き指導支援をしていきます。

※１）下妻市内のナシ、ブドウの生産販売団体及び個人で構成されており、令和5年度の会員数は106名。

JA常総ひかりのメロン輸出の取組

JA常総ひかりでは、ナシの輸出で輸出仲介業者や現地輸入業者との繋がりが強化されたことにより、平成27年からメロンの取引を始めました。産地輸出支援事業※2を活用するなどし、これまでに中国の香港、マカオ、アメリカのロサンゼルス、ハワイ、シンガポールへ輸出されています。本年度は新たな取組として、中国やシンガポールで引き合いの強い赤肉品種の「タカミレッド」も取り扱われました（写真）。

取扱量は、アジア向け（シンガポール、香港）へ5月下旬～6月下旬までにタカミレッド10,420kg（2,084ケース）、タカミ7,225㎏（1,445ケース）となりました。

今後JA常総ひかりでは、新しい輸出先も視野に入れ、販路開拓に向けた取組みを拡大していくこととしています。

※２）本県産農産物の輸出を促進するため、現地量販店でのプロモーション活動（例：ポスターやポップの作成等）や試験輸送等を通じ、商品の認知度向上につなげる取組を支援。

シンガポールでの試食販売の様子

ポスターやポップでタカミメロンPR

（写真の出典：茨城県営業戦略部農産物輸促出進チーム）

県内でトマトキバガの発生を初確認！

県内に設置したフェロモントラップにおいて、トマトキバガが捕殺されました。県内全域で発生している可能性があるので、ご注意ください。また、圃場でトマトキバガと疑われる成虫・幼虫、食害痕を見つけた場合は、普及センターまでご連絡ください。

【形態の特徴】

- **成虫は翅を閉じた状態で体長５～７mm**
- **終齢幼虫は体長約８mm**
  体色は淡緑色～淡赤色で、頭部は淡褐色。
  前胸の背面後方に細い黒色横帯がある。

トマトキバガの成虫

トマトキバガの幼虫

【生態の特徴】

- **１年に複数世代が発生し、繁殖能力が高い**
  年に10～12世代発生する地域もある。
- **卵から成虫になるまでの期間は24～38日**
  気温の低い時期はさらに延びることもある。
- **成虫は夜行性**
  日中は葉の間に隠れていることが多い。
- **幼虫は１齢～４齢までの生育ステージあり**
  土中や葉の表面で蛹化する。

【被害の特徴】

トマトでは、葉の内部に幼虫が潜り込んで、食害し、葉肉内に孔道が形成され、食害部分は表目のみを残して薄皮状になる。

果実では、幼虫が穿孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に数mm程度の穿孔痕が生じるとともに、食害部分が腐敗する。

食害痕（葉）

食害痕（果実）

（写真の出典：農林水産省植物防除所原図）

詳しくは、「病害虫発生予察特殊報第1報（茨城県）」をご覧ください。

農業学園「農作業安全講座」を開催しました！

１０月24日、ヤンマーアグリジャパン（株）関東甲信越支社において、農業学園第4回講座「農作業安全講座」を開催し、新規就農者等17名が参加しました。講座では、近年の農作業事故の発生状況や事故例と原因、農業機械の安全使用についてテキストを用い学んだほか、トラクターのセルフメンテナンス実演、最新機器の見学を行いました。受講者からは、講座で学んだセルフメンテナンスを早速実践してみたいとの声が多く聞かれ、農作業安全対策の実践につながる講座となりました。

次回講座のご案内

次回は、先輩若手農業者が、自家経営課題の解決に向けた取組を発表する「プロジェクト発表会」への参加を予定しています。

ご興味のある方は当普及センターへご連絡ください。